

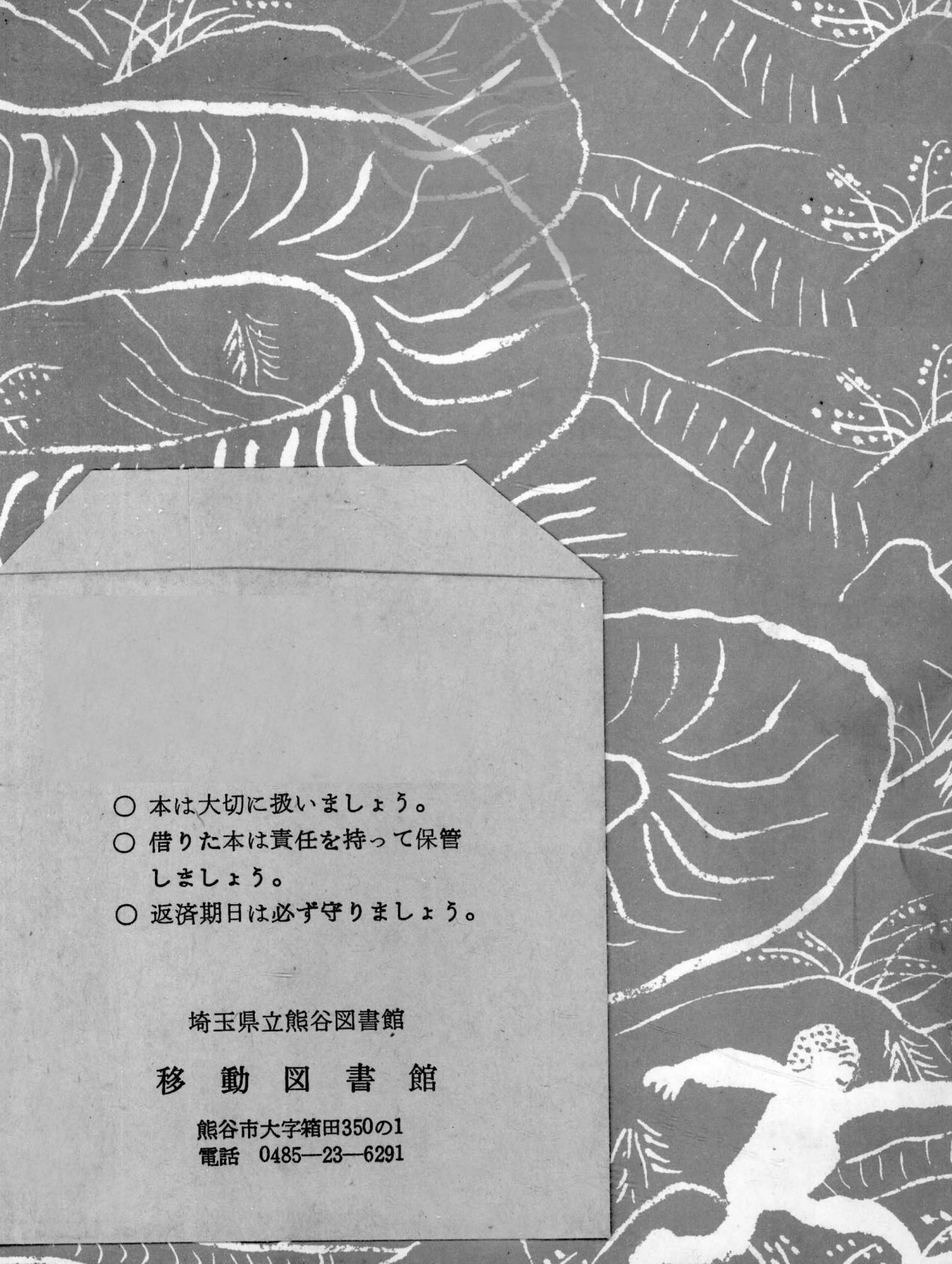
小さな心の記録シリーズ

ねしよんべん

木原九郎十郎編 梶山俊夫画

ものかたり



- 
- 本は大切に扱いましょう。
 - 借りた本は責任を持って保管
しましょう。
 - 返済期日は必ず守りましょう。

埼玉県立熊谷図書館

移動図書館

熊谷市大字箱田350の1
電話 0485-23-6291

ねしょんべん
ものごと
り

棕鳩十編
尾山俊夫画
童社





かみな

さまのふろ

お



まえがき

棕 鳩十

五月の空のように、はるばるとひらけた海のように、解放され
た心をもつて、すすすくとのびていく、幼い人たちのことを考え
ると、こちらの心も、明るいしあわせを感じるものです。

ところが、幼い人たちのまわりには、あんがいには、心をぎりぎ
りとしぱりつけていくもの、劣等感をうえつけるもの、そういう
ものが、幾重にもとりまいています。それらのものを、ひ
とつひとつとりのぞく仕事も、児童文学にたずさわるもののつと
めであると思います。

この『ねしょんべんものがたり』は、そういうところみの一つ
として、編集したものです。

幼い人たちの心に、この一冊の本が、解放の一つの窓をひら
いてくれたら、ほんとうにうれしいことだと思います。



うみはだれのおねしよかな
かんざわとしこ
神沢利子 10



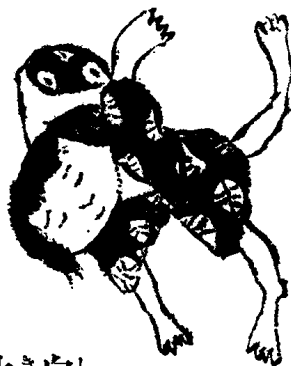
こいのぼりの おまじない
ささきえつ
佐々木悦 18

はな
花におしっこかけちやだめ
ますむらきみこ
増村王子 37

キツネとぼくのねしよんべん
あかさのりひさ
赤座憲久 43



おねしよとカエル
すなだひろし
砂田弘 62



しろみ
白い三日月のつめ
きたむら
北村けんじ 52



かみなりさまの ふろおけ
おおかわえつせい
大川悦生 28



ネズミとおねしよとざぶんと
関 ひな子^こ 71



にっぽん
日本のちずを
かいたこと
横谷 輝^{てる} 78

たつた一どのおねしよのはなし
生源寺美子^{しょうげんじはるこ} 85

ゆたんぽのおもいで
依田好照^{よだこうしょう} 102

ゆめのあとしまつ
清水達也^{しみずたつや} 109

さいごのおねしよ
まえかわやすお
前川康男^{まえがわやすお} 111

どんどやとねしよんべん
たかしよいち 128



トクさんとともだちになった日^ひ
菊地 正^{きくちただし} 136



だれのおねしよかな
須藤克三^{すどうかつぞう} 94



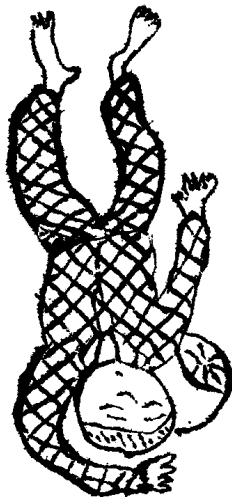
へびとおしっこ
むくはとじゅう
棕鳩十
169

わたしの
おねしよのはなし
きたはたしすこ
北畑静子
146



またやつたのか！
おい！ おちゃんちゃん！
しろたのぼる
代田昇
154

ねえさまおねしよ
きたばたけやほ
北畠八穂
181



せんじょう
船上からとばすゆめ
つぼたじょうじ
坪田譲治
192

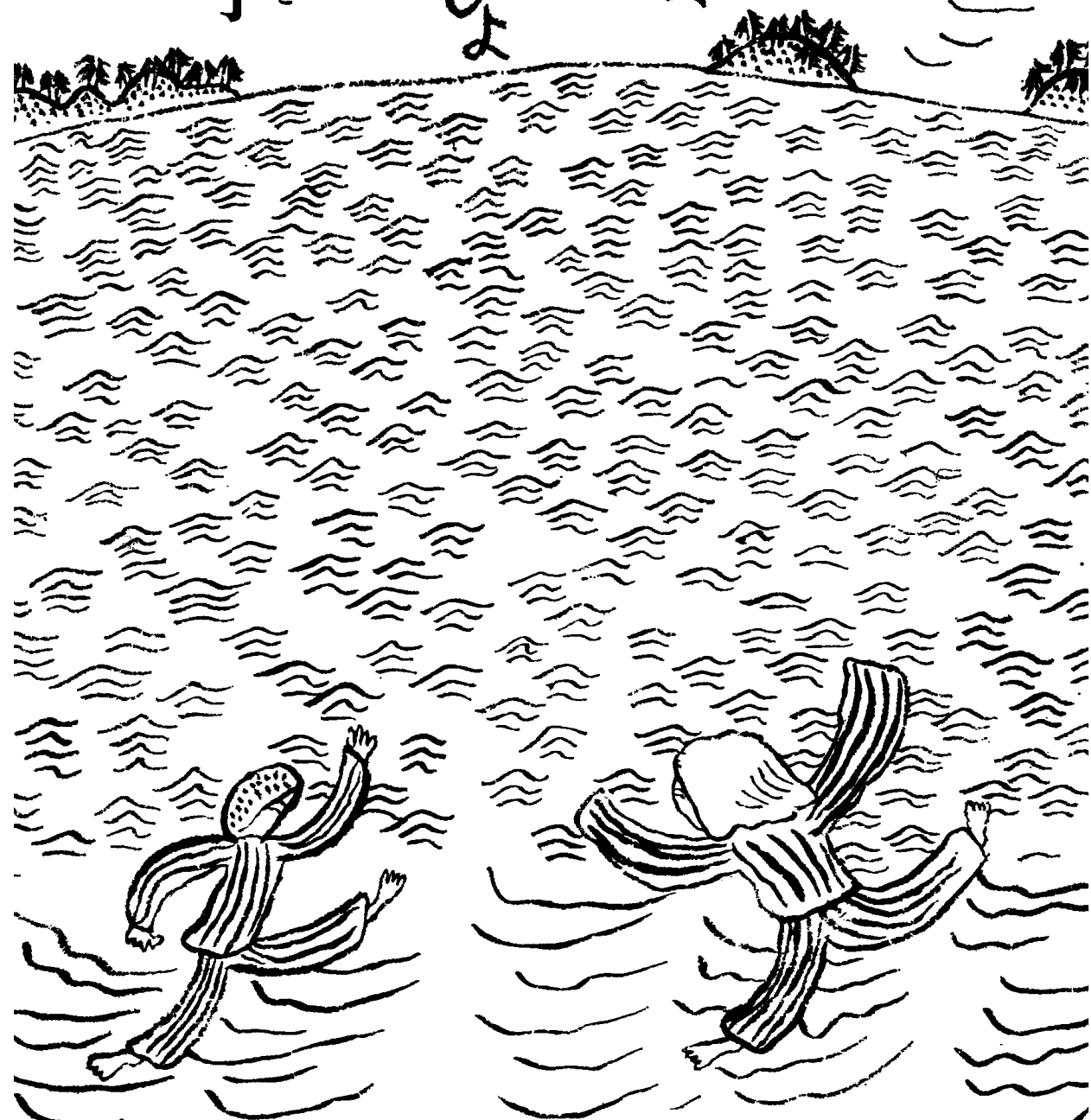
マヌカン・ピスとぼくのはなし
いのしょうぞう
猪野省三
197

おおしま
大島こうろ
いわさなきょうこ
岩崎京子
211





うみは
だれの
おねし
かな
神沢利子
かんざわとしこ



おねしょをしたとき、いつも、してから、あららとおもう。

わたしのからだからさよならしたはずのものが、どういうわけだか、ふわあーつと、あたたく、からだの下したのほうをとりまいて、目めがさめる。

ゆめの中なかでは、たいてい、おしっこにいきたくて、ちゃんと、トイレで用ようをたしてるつもりだ。あそんでいて、のはらで、することだってあるけれど、それも、ちやんと、

「みみずも かえるも ごめんなさい。」

と、あいさつしてから、してるのだ。

からだのどこもぬらさず、まして、パンツをはいたままするなんてことは、ぜったいない。

ところが、どうだろう。わたしは、いつも、だまされてしまう。

おしっこがしたくなって、どのトイレを、たいていみても、みな、まんいん。

つらいのをがまんして、やっと、あいたトイレにとびこんで、

ああー、やっぱり、かってがちがう。

おしっここのまえにも、これは、ゆめかな、ゆめじゃないな。だいじょうぶだな。と、かんがえてするのだけど、そんなにもようじんしてもだめなのだ。

目をさますと、わたしはふとんの中^{なか}。

ふとんには、りっぱなちずができてゐる。

だまされた、だまされた。

わたしは、ふんぷんしてしまふ。

六人^{にん}きょうだいの五ばんめだから、わたしがおねしよをしても、わりあいへいきだ。（これが、はんたいに五人^{にん}もいもうとや、おとうとをもった、にいさんだったら、ちびたちに、はずかしかったかもしれないが。）子どもべやのストーブのよこに、おとうとのと、わたしのと、かわりばんこに、ふとんが、ゆげをあげていた。

ある、天気^{てんき}のよい日^ひ、

わたしと、おとうとと、だれだったかと三人^{にん}、山^{やま}にいった。

山^{やま}は、カンゾウの花^{はな}が、いっぱいだった。わたしたちは大よろこびで、花^{はな}をつんだ。それから、すこしあるくと、なんと、目^めの下^{した}に青^{あお}いうみがみえた。

「わあ、うみだ。」

三人^{にん}とも大きなこえをあげた。

そのころ、わたしたちは、うみからはなれた村^{むら}に、すんでいた。むかしのことだ

から、バスも、じかよう車しゃもない。

うみへいくなんて、一年ねんにいったんくらいのものだ。

三人にんとも、あんまりちかくにうみがあつたので、うれしくて、山やまをかけおりた。

「およぎたいなあ。」

と、だれかがいう。

「おようよ。」

と、わたしがいう。あきれた！ わたしは、川かわへはいるのもこわくて、およげるところじゃないくせに。

うみのむこうに、小さな島しまがみえた。いつかみた、え本ほんのようなけしきだ。

空そらは夕ゆうやけで、オレンジいろにそまってきた。

「島しままでいこうよ。トコちゃん。」

と、おとうとがいう。

「いこうよ、スワンになっていこうよ。」

わたしは、へいきでこたえた。

そして、あらふしぎ。わたしたちは、三わのスワンになってしまった。

三わのスワンは、うみにゆっくりとあるいていった。すると、なみがよせてき

て、スワンになったわたしのからだを、ふうわりともちあげた。なみが、おなかとみじかくちぢめた足あしに、なまあたたかくふれて、わたしをつつみ、わたしは、なみにのっておよぎだした。

オレンジいろの空そらのむこうに、あかるくうかんでいる小島こじまめがけて――
そのときだった。

大おほなみが、いきなりわたしをゆすった。ぐらぐらとわたしはゆれた。
と、いきなりおとうとのこえが、

「トコちゃんたら！」

おとうとは、わたしをりょう手てでゆすぶっている。

「やい、おねしょしたな。ほくにおしっこかけたな！」

おとうとは、まっかになっておこっている。

ゆめだったのだ。あたりは、あかるい朝あさだ。

なんということだ。わたしはおふとんなかの中で、おふとんはぐっしよりぬれている。

「おしっこなんかしないよ。あんたでしょ。」

「なんだと、トッコ！」

おとうとは、ちびのねえさんのことを、ねえさんとよばない。けんかときは、

トッコになる。

「あたしじゃないもん、あたしはスワンになって……。」

わたしは、くりかえした。

おとうとふたりでねていたふとんはぬれて、わたしのねまきもパンツもぬれていた。それなのに、おとうとのパンツのぬれるはずのところが、ぬれていない。

「あれれ。」

わたしは、しまったとおもった。



じゃ、おねしょしたのは、やっぱりわたしなのか。スワンになって、うみにはいつて、なみが、わたしのまわりによせてきたと、おもったのは、これだったのか。

わたしは、ぼかんとして、それから、やっと、こう、^き気がついたのだ。わたしは、くしゃんとなった。いつも、おねしょのあいぼうで

うみは だれのおねしょかな